

# 26PB-am294

医療面接における患者心理への配慮 ～模擬患者参加型授業を通して～

○竹平 理恵子<sup>1</sup>, 池谷 博美<sup>1</sup>, 有田 悦子<sup>1</sup> ( <sup>1</sup>北里大薬)

【目的】医療面接において薬剤師が専門性を発揮するためには、患者の心理状態への配慮が不可欠である。本学では、模擬患者（SP）とのロールプレイ（RP）を通して、患者心理への配慮を学ぶ機会を提供している。今回、RP 後に学生と SP が記載したレポートから関連する記述を抽出し、授業の効果と改善点を考察した。

【方法】薬学部4年生255名が、薬剤師役としてSPを相手にRPを実施した。RP後、学生とSPは、薬剤師役の良くできた点と改善点について記述し、患者心理とコミュニケーションに関する項目について薬剤師役の評価をした。記述内容は、テキスト解析により用語を抽出し、『言語』『非言語』等のカテゴリに分類した。

【結果】学生の自由記述255件中、良くできた点として49.0%（125件）が『非言語』による表現を、改善点として47.5%（121件）が『言語』に関連するコミュニケーション技法を挙げていた。評価については、学生から208件、SPから222件のデータが得られた。“傾聴”“共感”は、学生とSPともに約75%で“できた”と評価した。“不安を把握したうえで説明”“わかりやすい説明”は、SPはそれぞれ約70%と約80%で“できた”と評価したが、学生はどちらも約50%に留まった。

【考察】約半数の学生は表情や視線等『非言語』表現に配慮してRPを実施したことがうかがえた。このことがRP時の姿勢や態度に反映され、“傾聴”“共感”の評価に繋がったと推察された。改善点として、用語の選択等を含めた『言語』に分類された記述が多いことから、学生は相手に合わせた説明の難しさを実感したと思われる。RP時の学生の説明は、患者の心理状態やレディネスの把握が不十分な状態で行われたため、“説明”の評価に違いがでた可能性が考えられた。今後は、患者の内面を充分把握したうえで、相手に合わせた対応を学ばせる必要がある。